

## 高齢者の心房細動について

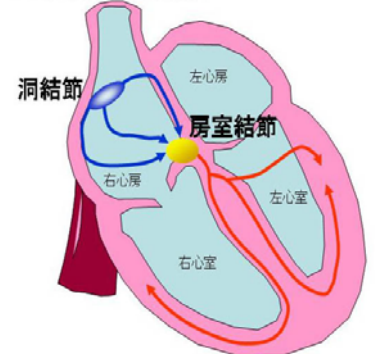
心房細動は高齢者に多く見られる不整脈です。加齢とともに増加し、70歳代の5%、80歳代の10%の割合でおこり、日本国内に130万人いるとされています。自覚症状は動悸に気づくこともありますが、発作に気づかずに健康診断等でたまたまみつけることが多くあります。

### ●心房細動は心臓がどのような状態になるのでしょうか

心臓は全身に血液を送り込むために、収縮、拡張の心拍を規則正しく行っている筋肉でできたポンプの役割を果たしています。正常の心臓は心房（血液を一時ためておく部分）の上部にある洞結節から1分間に50～100回の電気信号が起こり、それが心臓全体に伝えられ規則的に動いています。

心房細動は、心房から1分間に約300～600回もの不規則な電気信号を発生し、心臓全体が細かく震え、心房から心室（血液を全身に送り出す部分）への血液が十分に流れなくなることで心臓の機能が低下していく状態です。

正常の刺激伝導系



### 心房細動は治療を必要とする不整脈の中で最も多い不整脈！

問題は、心房が完全に収縮できないため、補助ポンプとしての働きが不十分となり、左心室から血液を送り出すポンプ機能が約30%前後低下することです。身体の働きなどに対する心拍数を調節する仕組みが障害され、過剰な心拍数の増加が起こり（頻脈）、心不全（心臓の過労状態）の危険性が高くなります。

また、脳梗塞（心原性脳梗塞）の原因にもなります。正常な心房収縮ができなくなると、左心房の中に小さな血の塊（血栓）ができます。この血栓は、心臓の超音波検査でモヤモヤ像として認められ、時には心臓内から流れ出し、全身の細い血管をつまらせることになるのです（塞栓症）。

**高齢者では、心臓疾患がなくても脳梗塞の危険性が高く、抗凝固療法が心原性脳梗塞発症の予防に有効**と考えられています。

### ●脳梗塞の危険性が高い人はどんな人でしょうか？

心房細動の患者様の中でも、脳卒中または一過性脳虚血性発作の既往がある、うっ血性心不全、高血圧、糖尿病、75歳以上であるなどのいずれかの危険因子を2つ以上認める人は、脳梗塞がおこるリスクが高いので、年齢に関係なく、抗凝固療法を考える対象となります。この評価に使用されるのがCHADS<sub>2</sub>（チャッズ2）スコアです。

合計6点満点で、点数が高いほど脳梗塞の危険性が高いと考えられています



心房細動がある人は、ない人に比べて脳梗塞を発症する確率が5倍高いといわれています。また、男女比でみると男性のほうが女性に比べて1.5倍発症しやすく、それは年齢とともに上昇していきます。**自覚症状がない人でも心電図で発見されやすいため、検査を受けることをお勧めします。**当院では心電図検査、心臓エコー検査などの検査を随時行い、定期的に心臓のCHECK（チェック）を行っています。ご相談はスタッフまでお伝え下さい。